

助産師への想いをかたちに ― 支えてくれた人との出会いから進んだ道

《助産師を志した原点》

私が助産師を目指した原点は、母との何気ない会話でした。出産は大きな喜びの出来事である一方で、不安や恐怖も伴う場面であることを知り、その瞬間に寄り添い、新しい命の誕生を支える助産師という存在に強く惹かれました。



《迷いを乗り越え、背中を押された進路選択》

大学で学ぶ中で、自分はどの道に進むべきか悩んだ時期もありました。しかし、教員から「今だからこそ挑戦してみたらどうか」と背中を押していただき、家族からも温かく応援してもらえたことで、自分が本当に進みたい道が助産師であると確信し、助産学校への進学を決意しました。

《専門学校（助産学科）を選んだ理由》

私は将来、生まれ育った地域に貢献したいという思いがあります。本校は、地域に根差した助産師育成に力を入れており、その点に強く惹かれました。

1年間で集中的に学べる環境は、早く母子に関わる現場に立ちたいという自分の思いと一致していました。また、丁寧な指導体制が整っていることや、同じ志を持つ仲間とともに学べる点も、進学の手決め手となりました。

《受験準備で意識したこと》

受験準備では、オープンキャンパスへの参加や先生・先輩への相談を通して、受験勉強の進め方を具体的にイメージすることができました。苦手な分野は3年次から少しずつ学習を進め、実習が落ち着いた時期から本格的に勉強を開始しました。

試験範囲が広いので、教科書や参考書を用いて出題傾向を踏まえた学習に取り組みました。面接練習では学内の先生方から丁寧な指導をいただき、自分の思いを自分の言葉で伝えられるように練習を重ねました。先輩からの助言も大きな励みとなり、学習計画や受験への心構えを整えることができました。

また、本校には集中して勉強に取り組める学習環境が整っており、その点でも大きな支えとなりました。

《目指す助産師像》

私が目指す助産師は、「この助産師さんがいてくれてよかった」と思っただけの存在です。妊娠・出産という不安の大きい場面で、そばにいてだけで安心していただける温かさ、信頼して任せられる確かな知識・技術を大切にしたいと考えています。

近年は高齢出産の増加などにより妊娠・出産のリスクが多様化しており、ハイリスク妊産婦への支援の重要性も高まっています。どのような状況でも、出産が「新しい命の誕生を喜べる経験」となるよう寄り添い続けられる助産師を目指し、これからも学びを深めていきたいです。

臨床と研究をつなぐ助産師を目指して

「助産師を志したきっかけ」

大学 2 年次の母性看護学の授業や講義を通じて助産師という専門職に強く関心を持つようになりました。助産師の仕事内容、妊産褥婦への関わり、産婦人科病棟のナースステーションの雰囲気などを知る中で、「助産師になりたい」という思いが固まりました。

「助産学専攻科を選んだ理由」

まずは県内で助産師として活躍したいという希望があり、加えて将来的に研究職や教員としての道を視野に入れていました。そのため、助産師資格取得後のキャリアを広げる基盤をつくるために、県内の大学院で修士課程を修了しようと考え、進学先を選びました。



「3 年次から始めた受験準備」

助産学専攻科進学に向けた具体的な受験勉強は、3 年次 6 月頃からスタートしました。大学院進学には TOEIC スコアが必要だったため、6～9 月にかけては学校の定期試験や実習前の事前学習と並行しながら、TOEIC の学習にも力を入れました。

「卒業研究と受験準備の両立」

4 年次 1 月後半から卒業研究に本格的に取り組み、同時に看護師国家試験の必修問題を解き始めるなど、少しずつ受験準備も進めていました。進学先で研究計画書の提出が求められていたこと、修士課程に進むための基礎固めをしたいという思いから、卒業研究は特に丁寧に進めました。母性看護学の先生方からの手厚いサポートを受けながら、文献検討の重要性や、研究の根拠を示す論理的文章の書き方を学ぶことができました。卒業研究をしっかりと行ったことで、研究室訪問や受験面接でも論理的に回答できたことが大きな自信につながりました。

「実習期間後の本格的な受験勉強」

4 年次の 5 月～7 月末までは領域実習・統合実習があり、受験勉強に本腰を入れたのは 7 月末からでした。試験内容が母性看護学の口頭試問だったため、母性看護の看護過程を何も見ずに言えるよう繰り返し唱え、基準値や用語の確認も随時メモして覚えました。

直前期の詰め込みとなりましたが、実習での学びやこれまでの積み重ねがあったことで、受験までに何とか形にすることができました。

「目指す助産師像」

私は、助産師として妊娠・出産・育児という特別なライフイベントに寄り添い、女性とその家族にとって「安全で前向きな経験」となるよう支援したいと考えています。

そのために、進学後は現代社会の多様なニーズに応えられるよう、妊産褥婦や家族へ高度な専門知識と技術に基づく産科的支援を実践できる助産師を目指して学びを深めていきたいと考えています。

実習で確信した夢、助産師への道

《助産師を目指したきっかけ》

高校生の頃、医療ドラマを通して「命の誕生」という奇跡の瞬間に携わる助産師の仕事に憧れを抱きました。大学3年次の母性看護学実習で出産の場に立ち会った際、痛みの中で懸命に新しい命を迎える母親と、そのそばで寄り添い支える助産師の姿を目にしました。その瞬間、女性が安心して出産を迎えられるよう支える存在になりたいと強く感じ、助産師を目指す決意を固めました。母親が初めて新生児を胸に抱いたときの涙と笑顔が忘れられず、生命の尊さと助産師の果たす役割の大きさを改めて実感しました。



《受験勉強の取り組み方》

母性看護実習を終えた3年12月頃から国家試験の必修科目を少しずつ復習し始めました。本格的な受験勉強を始めたのは、統合実習を終えた8月頃です。実習を通して「やはり助産師になりたい」という思いがますます強まり、そこから集中して学習に取り組みました。特に直前の1か月間は勉強に全力を注ぎながらも、友人との時間やアルバイトを続けて心のバランスを保つことを大切にしました。

《進学先を決めた理由》

進学先として〇〇大学助産専攻科を選んだのは、母性看護学の先生に相談しながら、自分の中で何を大切にしたいかを整理した結果、先生の勧め、実家からの通いやすさ、そしてオープンキャンパスで感じた温かい雰囲気の魅力を感じたからです。過去問題をその場で見せていただいたことも大きく、出題傾向を把握した上で効率的に学習を進めることができました。

《試験対策の工夫》

試験対策では、まず基礎知識を整理したうえで、細かな部分を丁寧に確認し、過去の国家試験問題を繰り返し解くことで理解を深めました。先輩から「アセスメントや看護計画の立案が出題された」と聞いていたため、実習記録や教科書を振り返り、自分でも立案できるように準備を重ねました。今年は出題されませんでしたが、その学びは面接で自分の考えを整理して話す際に大いに役立ちました。

小論文は過去問を参考に約12題を練習し、本番では落ち着いて書くことができました。面接では、志願理由書で自分の思いを整理していたことで、言葉に迷わず気持ちを伝えることができました。先生方が温かく話を聞いてくださったこともあり、「女性に寄り添う助産師になりたい」という思いを素直に表現できたことが合格につながったと感じています。

《今後の目標》

今後は、妊娠前から出産、育児、そしてその後の人生の節目まで、女性が安心して歩めるよう支援できる助産師を目指したいです。今回の合格を通して「努力は必ず実を結ぶ」という自信を得ることができました。これからも学びを重ね、女性とその家族の思いに寄り添い、希望を届けられる助産師として成長していきたいと思っています。